

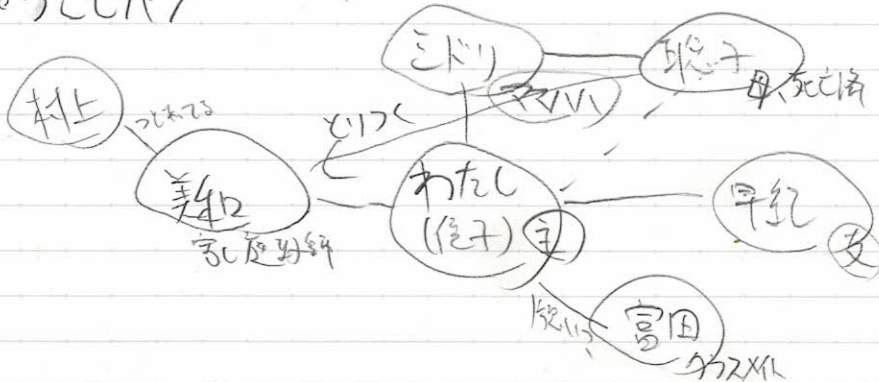
56/7/23

書籍概要

・うたむパン (瀧羽麻子 著、幻冬舎文庫)

・職場近くでタイトルに惹かれて買ったが2年近く読んでいなかった。
・なので内容は知らない。

うたむパン



～pp.140まで

・私には高校生の青春というものはわからぬ。

・がこの作品のひとひとの距離感間というものに絶妙で、「人間、こうであってほしい」と思うような造形であった。とても単純で、でも少し複雑。

・その一方で、この作品の時系列を豊く「聡子の死」というものについてはかなり唐突に触れられ始め、セクションごとに爆発で事実が提示されていく。そこに関しては向いという、味わいが薄いなあと感じた所だった。

・おそらく4月～12月まで時間経過はしているが、行間を読んだとしても、やっぱり優子は突然のオカルト現象という暗い真実を受け入れられはしなかったんじゃないか？と不安になる。

・がんはれ富田、お前カレンだろ。
後半へ続く。